信毎俳壇

坊城 俊樹 選

ふらここや往きも還りも大宇宙　（飯山市）田中 琢雄

駄つ児の如き大国春嵐　（下條村）福嶋田鶴子

北国の訛りゆたかに新社員　（長野市）福沢健太郎

野に遊ぶ子供の頃の空がある　（佐久市）水間喜美子

お見舞にレトロプリンを春の風邪　（長野市）宮沢 朝子

鞍山人気分で今日は木の芽和　（長野市）武田 芳子

鳥雲に還らざる日を懐かしむ　（佐久市）栗林 貞夫

春耕やあとずさり又あとずさり　（岡谷市）桑沢ひろ子

手を繋ぎ菜の花分けて下る土手　（東御市）広沢里枝子

母の背に学びし畑畝植うる　（長野市）清水美佐子

佳作

とどめなき川の流れに春の雪　（佐久市）大井 悦子

虚子の忌のお捻りどっと村歌舞伎　（真田町）松沢 陸

選評　一句目、ブランコというものを大きな宇宙を往復するものと捉えた壮大な句。往って還ってくるロケットのようなブランコに乗って。二句目、社会性のある大人の句。何処の国とは言わないが我が国は大国らしい。それを春嵐と捉えた感性も凄い。三句目、この句のほんわかとした余韻が素敵。新入社員は北国の出身なのだろう。確かにその訛りとは豊穣なるものであるに違いない。

今井 聖 選

啓蟄や土器になれずにゐる地雷　（佐久市）西田 和彦

花屑を分けて現る鯉の口　（須坂市）丸山 英子

鶏小屋の裸電球菜種梅雨　（長野市）荻原 宏祐

これまでの我を見て来し梅咲けり　（飯綱町）坂井 寿男

逆算で過ごす一日うららけし　（諏訪市）小林さよ子

新学期クラスに四人「かよこ」をり　（須坂市）東鳥賀代子

いくたびも主かへなる城の花　（上田市）竹内 重美

畑打つやひと鍬ごとに手を腰に　（岡谷市）大沢 誠

花の雨主治医の葬の混み合へる　（長野市）白鳥 寛山

ひと雨をことほぐやうに牡丹の芽　（佐久市）佐藤 勝子

佳作

梅見上ぐ円空仏に似し翁　（松川村）岡 豊村

長靴に履かれ春雨一年生　（飯田市）吉沢 斐

選評　一句目、ときどき太平洋戦争中の不発弾が地中から出てくる。まだ未処理の地雷がどこかに埋まっているかもしれない。「土器になれずに」の思いが出色。二句目、鯉の口の「花屑を分けて現る」が動きの機微を見事についている。三句目、鶏小屋の裸電球と菜種梅雨の醸し出す雰囲気が絶妙。四句目、作者の家の庭にある梅の木はずっと作者を見てきた。そして今年も花開く。

神野 紗希 選

子を抱へ柳へ消えてゆく猿ぞ　（小諸市）加藤 陽介

花束の根元に輪ゴム卒業期　（松本市）久我 綽乃

三人で三時に三つ桜餅　（高山村）五味 力

学生服のカラアは固し初燕　（上田市）田名網 剛

山茱萸の花や言い訳ばかり汝は　（松本市）辻 佳代

空青しアルプス高し青き踏む　（長野市）宮沢 信博

薺採る草の中から選り分けて　（伊那市）鈴木 秀雄

百歳は命の単位草萌ゆる　（佐久市）市川小夜子

教室の牛乳びんに黄水仙　（長野市）山田登志夫

早春の水の冷たさ皿洗う　（小諸市）星野 直人

佳作

あさまやまこりらのよこがおみえたんだ　（軽井沢町）れお

人込みにもまれて老いの花見かな　（中野市）小林かつ子

選評　一句目、さみどりの春の柳と、生まれて間もない猿の子と。みずみずしい命の呼応がさりげなく書き留められた。二句目、卒業シーズンには花束がよく贈られる。その根元を縛る輪ゴムから、花を、私を、ふわりと解き放つ。三句目、「三」を三つ重ねた楽しさ。桜餅の「さ」も頭韻が響き合う。四句目、襟に嵌めたカラーの固さも初燕の「初」も、凜々しく初々しい。燕の清しさが、緊張の新入学を寿ぐ。